北条砂丘地葉たばこ廃作地有効利用への挑戦！

～　集落へ白ねぎ栽培の拡大を～

北栄町　　坂本憲昭

１．我が家の農業

私は、30 歳くらいの時に父が病気になったのをきっかけに就農し、それ以来約 30 年間ずっと葉たばこ専作農家としてがんばってきました。しかし、近年のたばこ税の増税や健康志向から消費量は年々減り続け、葉たばこ栽培の将来は明るいものとは言えなくなってきました。

そんな中ではありますが、6 年前より息子が後継者として農業に従事してくれ、いずれは経営基盤を引き継いでいこうと考えております。

しかし、現状では葉たばこ栽培の将来を考えると不安も大きく、新たな栽培品目の導入が必要ではないかと考えておりました。

そんな折、ＪＴが葉たばこ廃作募集を実施し、我が家で 30ａの一部廃作に応じ、これを機に廃作地を有効利用し、新たな栽培品目となる白ねぎ栽培に挑戦しようと考え、今年 20a 作付しました。

北条砂丘において栽培可能な品目の中から白ねぎを選んだ理由は、

①葉たばこ栽培と労働時間が重ならないこと

②葉たばこと異なり在圃性が高く作業時間に融通が利くこと

③徐々に栽培面積が増やしていけること

④ＪＡによる販売体制がしっかりしており単価が暴落することが少ないこと

などであり、作付経験がなくリスクはありますが、北条砂丘で近年栽培面積が拡大してきている白ねぎ栽培になんとかチャレンジしてみようと決心しました。

２．　集落の状況

我が　集落では、３０～４０代の農業従事者は息子を含めわずか３名、５０代後半～７０代がほとんどと高齢化が進みつつあります。若者はいますが、農業以外の分野で就職している状況で、５年後１０年後を考えると　集落の農業も明るい未来とは言い難いです。

近年では集落でも、上述のとおり葉たばこをめぐる状況から数件が廃作され、その葉たばこ廃作地が徐々に荒れてきているところです。

そこで、葉たばこ栽培から一部廃作し新たに白ねぎ栽培へ挑戦するというモデル的取組を集落内で実践し、荒廃しつつある我が下神集落の葉たばこ廃作地に白ねぎ栽培を拡大し、５年後１０年後まで農地を守ることができればと考えております。

３．農業経営の状況（平成２３年）

（１）耕作面積　239ａ

（２）品目構成

葉たばこ　　200ａ

※葉たばこの生産・販売状況

	栽培面積（a）	生産量（kg）	単価（円）	販売額（千円）	備考
平成21年	210	4891.5	1,525	7,458	
平成22年	210	3153.0	1,588	5,007	
平成23年	200	4261.0	1,622	6,910	

（3）労働力

私　　妻　　息子　　でフルに農業従事し、葉たばこ苗移植（3月）に5名（述べ2日）を臨時雇用している。

4. プランの目標

平成24年に葉たばこ栽培面積を200ａから170ａに減反し、20ａの秋冬ねぎ栽培を始めています。目標の27年に向け、栽培面積を徐々に増やし45ａを目標とします。また、作業効率・品質の向上による反収の増加を図ります。

品目		H23実績	H24	H25	H26	H27
秋冬ねぎ	栽培面積（a）	0	20	30	40	45
	反収（ｋｇ）	0	2,250	2,400	2,400	2,400
	単価（円/kg）					
	販売額（千円）					
葉たばこ	栽培面積（a）	200	170	160	150	145
	反収（ｋｇ）	213	213	213	213	213
	単価（円/kg）					
	販売額（千円）					

5．現状の課題と改善内容

（1）栽培技術・方法の確立

現在は、近所の生産者、普及所、農協に助言をいただいておりますが、今後は現地指導会への積極的な参加、他産地への視察等情報収集に努めながら栽培技術を習得し、品質の良いものを安定して出荷してく必要があります。

また、息子は農村青年会議に在籍しているので、青年会議での活動を通じて西部の若手生産者と意見交換や、インターネット等の情報収集も含めて栽培技術の確立を目指していってくれるとのことで、プロジェクト活動も考えているようです。

（2）作業の効率化

葉たばこ栽培と異なり、白ねぎ栽培では、「土寄せ」と「出荷調整では根葉切・皮はぎ」という作業があり、中でも出荷調整作業に係る労働時間がほとんどを占めているといわれています。面積拡大には、これらの作業を省力化し、労働時間軽減を図っていく必要があります。

「土寄せ」では、管理機が必要となってきますが、現在所有している葉たばこ用の管理機の馬力では溝を切るためにしか対応できず、畝を高く作っていく白ねぎ栽培に対応できません。また、タイヤ幅が大きく白ねぎ栽培の畝間には対応できないことがわかりました。今年初めての土寄せ作業はひとまず近所の良心的な農家に借りる予定ですが、砂丘地ではつち地に比べ部品の摩耗が激しく、傷みやすいので恒常的に借りるというのは気が引けます。

「出荷調整」では、省力化のための機械導入と作業効率をアップさせるレイアウトが必要です。手作業では、出荷が日量２０～３０ケースとなり、目標としている45a(3,600ケース)をシーズン中４か月のうちに出荷するには日量４５～５０ケース出荷していかなければ葉たばこの作業が始まってしまうので、出荷できず、圃場廃棄しなければならなくなってしまいます。何とか、目標面積すべてを出荷するためには、機械化が必要になってきます。

（3）集落における廃作地の荒廃防止

廃作地が荒廃しつつあるので、そこに白ねぎを導入し荒廃防止を行うべく、葉たばこ農家の集まりや集落の会合のときなどに、自分も含めた白ねぎ栽培農家で葉たばこ廃作農家へ白ねぎ栽培への誘導を行っていく必要があります。

6．作物導入による効果

（1）農地の有効活用

廃作地を活用し、新たな品目を導入することにより農業収入を安定確保することができます。

（2）労働時間の有効活用

葉たばこ栽培は、春から夏にかけて作業が集中しますが、冬季には農作業があまりありません。秋冬ねぎ栽培では、冬季に作業時間が最も多い出荷調整作業があるので、時間を有効に活用し農業収入アップを図ることができます。

（3）年間を通じた農業収入確保による経営安定

夏は葉たばこ、冬は白ねぎを出荷し、年間を通じて農業収入を確保し経営安定を図ることができます。

（4）農地の荒廃防止

地域のモデル的取組となり、地域の葉たばこ廃作地への白ねぎ導入をすすめ、農地の荒廃防止を図ることができます。

（5）地域農業の活性化

後継者も含めた経営安定モデルとして地域で実践することにより、今後若い世代へ農業継承していく農家を増やし、　　集落の農業を持続発展させていくことができます。

7．具体的な取り組みと役割分担

内容	H24	H25	H26	実施主体	支援機関
栽培技術の習得（白ネギ）	○	○	○	本人	ＪＡ・普及所
栽培面積の拡大（白ネギ）	○	○	○	本人	ＪＡ・普及所
作業の効率化（白ネギ）	○	○	○	本人	ＪＡ・普及所
機械の導入（白ネギ）	◎			本人	県・町
農産物の販路開拓 （白ネギ、中玉トマト、ホウレンソウ）	○	○	○	本人	
調整作業場所の整備	○			本人	

8．支援事業の内容

（単位：円）

年度	項目	事業費	負担区分		
			県	町	本人
２４	管理機（白ねぎ用）＋爪（土揚用、掘り取り用） 皮はぎ機＋コンプレッサー 結束機 播種機 簡易定植機	300,000 613,400 25,000 62,200 94,700	365,000	182,650	547,650
合　　計		1,095,300	365,000	182,650	547,650